三省堂中学国語教育

ことばの学び

NEWS LETTER

“説明”という言語活動

LETTER 7

OPENING COLUMN

“説明”の質的充実を

兵庫教育大学大学院
学校教育研究科
吉川 芳則

授業中、主人公の心情、文章の段落相互の関係など、生徒にはさまざまに説明を求めます。この「説明」という言語行為は、頻繁になされるだけに、簡潔端的であると聞き手の理解が容易にそして確かになります。

学級全体であれ、グループであれ、協働して学びを深めるためには、良質な説明がなされるよう質的充実を図っていかねばなりません。

そのために行いたいことの一つは、授業での発言の仕方の改善です。具体的には「最後まできちんと言い切らせること」です。

ある授業で「この場面の主人公の心情はどのようか」と教師が問いました。すると、指名された生徒は「悲しい」。これで終わり。あとは教師が補足をして、授業は進みました。

こうした単語型発言は、意外と教室に蔓延しています。「悲しい思いでいっぱいだと思います」「このときの心情は悲しさと悔しさが混ざったものだと考えます」のように、なぜきちんと言い切らせないのでしょうか。

文末まで言わず、述部をうやむやにする発言（説明）は、責任の回避、判断の欠如です。授業での自己の考えの説明は、「わたしは、○○だと思います」と主述を整えてセンテンスで言わせる。これを徹底しなければなりません。日々授業で発言の機会は設けています（そのはずです）。繰り返し意識させましょう。

改善の二つめは、「根拠と理由を伴った発言をめざすこと」です。わかりやすい説明、説得力ある説明には欠かせない条件です。このことの重要性は皆わかっています。が、教室では案外なされていません。また求められてもいません。

できれば一つめの「言い切る説明」とあわせて行わせたいものです。「○○ということばから、○○という筆者の考えがわかります。それは、○○だからです」のように、本文のことばを根拠に考えを主張し、その理由を述べます。こうした説明のモデルを示し、（教師自らも日々実践し、）そのようにできるようになった生徒には賞賛を惜しまないようにします。簡潔端的な説明的表現力が少しずつ、着実についていきます。

GUEST COLUMN

「伝えるコト」のデザイン

デザイナー
三宅 由莉

本や冊子を目にする機会はあっても、それらをデザイナーがどのような思いでつくっているかは、あまりご存知でないかもしれません。エディトリアルデザインの仕事は、筆者の伝えたいメッセージを、読者目線でリードすることです。内容や世界観に即して、文字の形、大きさ、色、配置、写真、イラストなどを組み合わせ、最適、最善の表現を探します。レイアウトの試行錯誤を繰り返す中で、言葉がいきいきと浮かび上がるように感じる瞬間があります。私にとっては、これがデザインする上での快感であり「伝えるコト」の楽しみなのです。

何かを説明する、伝えるということは、デザイナーだけの仕事でなく、どんな人にとっても必要なスキルです。デザインは装飾ではなく、コミュニケーションです。常に読者や相手への心づかいが大切なのは言うまでもありません。しかし、“表現の先には「相手」がいる”こんな当然のことを、自分も含め、人は時として忘れがちです。

ここでは、自戒の念も込めて、ついやってしまいがちな表現の落とし穴を紹介したいと思います。

①「言い逃げ」症候群

言いたいことを漏らさず入れたいという気持ちは分かります。しかし、送り手都合の表現は、読ませる意図のない約款のようになってしまいます。何を強調し、どのような順番で興味を喚起しながら見せていくか、最善は常に「相手と状況の中」にあるのです。

②「言葉のみ」症候群

とかく人は「言葉のみ」で全てを伝えようとする傾向があるようです。しかし実際には、多くの言葉を重ねなくても、写真やイラストを組み合わせることで、雰囲気を伝えたり、文字のサイズや色を工夫することで強調したりすることができます。伝えるべき事柄にあわせて、言葉と同時にビジュアルの利点を見直してみてはどうでしょう。

③「盛り込み」症候群

先に言ったことと矛盾するようではありますが、文字や写真やイラストなどの盛り込みすぎは、かえって伝えたい情報をぼやけさせてしまうことがあります。どこに注目を集め、何をしっかり読んでほしいのか、はじめて紙面を目にする読者になったつもりで客観的に眺めてみてください。千利休が一輪の朝顔を際立たせるために他の朝顔を全て切りとったという逸話は有名ですが、時には思い切った「引き算」を行うことも必要になります。

みやけ・ゆり
学習環境デザイン研究を軸としたワークショップ開発、UXデザイン、エディトリアルデザインなどを手がける。デザインワークに、「Listening Together 地球への感性　創造的な鑑賞による学びの実践」（総合地球環境学研究所）、『プレイフル・ラーニング』（上田信行・中原淳編著／三省堂）、『アクティブ トランジション』（舘野泰一・中原淳編著／三省堂）、『アクティブ・ラーナーを育てる高校』（中原淳・JCERI編著／学事出版）、『側の意匠』（トール出版）など。
http://www.troismaison.org

三省堂中学国語教育 ことばの学び NEWS LETTER 7
特集 ○ “説明”という言語活動
2017年2月28日発行
〈編集・発行人〉北口 克彦
〈発行所〉株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 03（3230）9411〈編集〉／9412〈営業〉
〈WEBサイト〉http://tb.sanseido.co.jp/
※このリーフレットは一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則って作成しており、弊社の機関誌として配布しています。
デザイン 宮内 佑／ひ・と・図・鑑イラスト 藤塚 尚子

からだで表現してみよう

―あの場面を1枚の写真に―

ミ ニ ア ク テ ィ ビ テ ィ

時間　約30～50分

内容　からだを使って、ある瞬間や場面を1枚の写真のように表現する。

手順

❶ **3～7人程度のグループを作る。**

❷ **からだで表現する作品やテーマを決める。**
例「少年の日の思い出」「走れメロス」
＊修学旅行や体験学習などをテーマとしてもよい。
＊テーマは、全体で1つもしくは、グループごとに決めてもよい。

❸ **どの場面を、どのように表現するかをグループごとに話し合う。**
＊実際にからだを動かしながら、作っていく。
＊ナレーションやアテレコのように、声をあてる役を設けてもよい。

❹ **発表会を開き、1グループずつ発表する。**
＊司会者が、写真を撮るときのように「3、2、1、カシャッ」と声をかけて、静止するタイミングを作ってもよい。
＊投票などで【コンテスト形式】にしたり、どの場面を表現しているのかを見ている人があてる【クイズ形式】にしたりしてもよい。
＊表現するときに工夫した点、からだで表現することによって、作品の解釈や理解が深まった点などを説明・交流する。

POINT

- ドラマ教育では「フリーズ・フレーム（静止画）」「スチール写真」「タブロー（1枚の絵）」などと呼ばれている。しぐさやせりふを伴わないため、ドラマ教育の手法の中でも比較的取り組みやすい。
- クイズ形式の場合、空き教室や体育館など、他のグループと離れて話し合いやリハーサルができる場所を複数確保しておくとよい。

三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO

全国美術館博物館巡り

07｜宮城県仙台市

せんだいメディアテーク

「だれもが情報を収集し、蓄積し、編集し、発信のできる環境の提供」を目的に、「生涯学習施設」として2001年に開館されました。現在は、哲学者の鷲田清一氏が館長をつとめています。

2011年の東日本大震災によって、せんだいメディアテークも大きなダメージを受けましたが、同年3月23日には活動を再開。市民協働のモデルを生かして開設された「3がつ11にちをわすれないためにセンター」では、「考えるテーブル」（参加者による対話型イベント）などを通して、「震災」について語る場づくりをすすめ、「記録したい人」や「発表したい人」を支えています。

アクセス

- 地下鉄南北線勾当台公園駅下車、「公園2」出口から徒歩6分
- 〒980-0821
  宮城県仙台市青葉区春日町2-1
  022（713）3171
  http://www.smt.jp/

ひ・と・図・鑑

世阿弥
Zeami
1363（未詳）～ 1443（未詳）
〈日本／能役者・能作者〉

離見の見（りけんのけん）にて見る所は、
すなはち見所同心（けんじょどうしん）の見（けん）なり。
その時は、我が姿を見得（けんとく）するなり。

〈大意〉「離見の見」とは、観客と同じ心で見るということである。そうすれば、自分の姿を見極めることができる。

世阿弥は、『花鏡』で一歩引いた視点を心がけることを説いている。舞台人としてのそのメッセージは、現代を生きる生徒たちが取り組む表現活動にも通じるところがある。

Q&A QUESTION 07

「メタ」って何？

ANSWER

「メタ（meta-）」は、「超～」「高次の～」や「～の後」などの意味を持つ接頭辞です。古代ギリシャ語の【meta】に由来すると言われています。例えば、何かについて述べたものがあるとき、さらにそれについて述べたものことを「メタ○○」などと呼びます。

「メタ○○」ということばは、ITの分野でよく使われています。階層的に構成されたプログラムにおいては、相対的な上下関係を一つ上の視点から明確に認識する必要があるからです。プログラミングの世界では、「情報言語を記述するための言語」を、「メタ言語」と呼びます。

教育の分野で用いられる「メタ○○」に、「メタ認知」があります。「メタ認知」は、「自身の認知プロセスを認知すること」と捉えられています。「深い学び」実現のポイントの一つである、学習者の思考プロセスの可視化には、学習者自身の「メタ認知」が欠かせません。「読み方を学ぶ」ということも、読むときに働く認知プロセスをメタ認知する活動であるといえます。

特集「“説明”という言語活動」

読んで理解することの意味と意義を伝える

大正大学人間学部
犬塚美輪

TOPIC

2015年のOECD国際学習到達度調査（PISA）の結果が公表され、読解力の低下が話題になりました。この要因として、文部科学省は「長文に触れる機会の減少」を挙げています。では、「読みなさい」と生徒たちに指示すれば読解力がつくでしょうか？　それだけではあまり効果があるとは思えません。

長文をただ読ませるというやり方がいまひとつ効果を持たない理由の一つとして、読むのが苦手な児童・生徒に「読んで理解すること」の意味や意義を示していない、という点が挙げられます。文章を読んで理解することは、単に読み上げることとは大きく異なっていますが、どう違うのかがはっきり教えられる機会はあまりないように思われます。読むのが好きな児童・生徒はたくさんの読書をとおして自然とその違いを理解しますが、そのような学習者ばかりではありません。授業の中で先生からはっきりと「これが『読んで理解する』ことだ」と指導されることも必要です。

心理学では、読んで理解することは「頭の中に内容を再構築すること」と捉えます。このままでは、児童・生徒に伝わりませんが、「人に説明できるかな?」と尋ねるとピンと来るようです。一読したあとで、「わかったかな?」と尋ねると多くの場合生徒たちは頷きますが、「じゃあ他の人に説明してみて」と言うと、とたんに表情が一変します。説明するためには、頭の中に内容が整然と再構築されていないといけません。読んで「なんとなくわかった」という状態のときは、単に文章を読み直すだけになったり、ポイントを外したヘンな説明になってしまったりします。こうした活動を通じて「読んで理解する」とはどういうことかを知ることが、読解力向上の第一歩でしょう。

また、学習者自身が説明する活動は、「なぜ読むのか」という文脈を広げる点でも意義があります。

国語の授業で「読みなさい」と指示された文章を読む場合、読む理由や目的はあくまで授業の中に閉じています。読むことに抵抗感を持つ児童・生徒はこの時点で意欲を失いがちです。しかし、例えば、授業のテーマを理解するために必要な文章があり、それが友達にとっても必要な情報ならどうでしょう。読んで理解し、説明することは、国語の授業を越えて重要な意味を持つ活動になります。

このように文脈を広げた説明活動を取り入れるには、いくつかの準備が必要です。例えば、ルールを設けたり、説明や質問の仕方を教えたりしなくてはならないでしょう。他の教科との連携も必要かもしれません。しかし、文脈をより広く示した説明活動は、積極的で効果的な働きかけになります。読解力向上のための一つの試みとして、広い文脈の中で「説明する」活動をぜひお勧めしたいと思います。

いぬづか・みわ

教育心理学者。文章やマルチメディアなど多様な題材の理解と批判的思考のプロセスについて調査・研究を行っている。

BOOK GUIDE

自分のことばで「説明すること、伝えること」は、どうすれば身につくのか。授業でのヒントとなる『授業づくり、学級づくりの勘どころ』と、日常会話ですぐに使える『伝え方の教科書』の2冊をご紹介します。

01　教室を知的に、楽しく！

授業づくり、学級づくりの勘どころ

吉川 芳則 著　三省堂　2015
A5判／208ページ　2,300円＋税
ISBN978-4-385-36500-8

互いに信頼できる仲間がいて、笑いがわき起こる学級。目標に向かって協力して取り組むことができる雰囲気のある学級。そうした場で展開される授業は楽しいはず――。長年、小学校で教鞭を執ってきた著者自身の経験にもとづいた、授業づくりと学級づくりのポイントをわかりやすく紹介。「○○さんと同じです」ではすませない、「かっこいい説明になったね」とほめるなど、授業に「説明すること」を持ち込むための具体的な指導についても解説。日々の授業づくりの「勘どころ」をつかめる一冊です。

02

伝え方の教科書

木暮 太一 著　WAVE出版　2013
四六判／255ページ　1,400円＋税
ISBN978-4-872-90603-5

日常会話から仕事の場面まで、幅広く使える「伝え方」の法則をステップごとに提示。第2章「『結論』は、常に『理由』とワンセット」、第4章「『広い』『早く』などは数字に置き換える」、第9章「相手に合わせて『論理の行間』を調整する」など、伝えるときに意識すべきことが満載。「『わかりやすい!』は社会を変える。」経済ジャーナリストの著者がそのコツを語ります。